

その他

「21世紀教育特設テーマ科目」の紹介 「津軽学 歴史と文化」への誘い

土持ゲーリー法一*

はじめに

『東奥日報』(2006年2月5日、朝刊)に、「『津軽』丸ごと学問に」の見出しで、4月から開講される「21世紀教育特設テーマ科目」が紹介されました。法人化後、弘前大学独自のカリキュラムを目指していただけに、幸先のよい「津軽丸」の船出となりました。新聞でも報道されていたように、この授業科目は、弘前大学でなければ作れない独自のカリキュラムで、「津軽の歴史と文化」を学問的にどのように体系づけられるか、内外から注目されています。この授業のカリキュラムの特徴は、ユニークな講師陣の顔ぶれにあるといえます。いずれも弘前大学もしくは津軽を代表する方ばかりです。この授業は、教壇から講師が一方的に講義するのではなく、学生の参加型授業を目指し、「実演」「実習」も行います。何よりも、本学附属図書館の「太宰治コーナー」に隣接して、新たに「津軽学コーナー」が設けられていることです。ここでは、この授業に関連した弘前大学出版会から刊行された「津軽シリーズ」の著書のほか、ビデオおよびカセットテープ、さらに、旧制弘前高等学校の青春を描いた『弘高青春物語』(絶版)のビデオなども準備され、「津軽学」を徹底的に学ぶ体制が整えられています。以下、「津軽学 歴史と文化」がどのようなものか説明します。

授業の趣旨

文化人類学者・青木保氏は、日本文化を「混成文化」と名づけ、三つの文化層の重なりで形成され、日本古来の土着文化の神道、アジアの大伝統の文化の儒教・道教や仏教に示された古代中国・インド文明の影響、そして、西欧近代文化あるいはアメリカ文化にあらわれていると述べています。

「津軽学 歴史と文化」の授業も、このような幅広い視点に立った「教養文化」を目指します。「灯台下暗し」と言われるように、我々は、案外、郷土の歴史や文化を知らないものです。これでは、良識ある社会人にはなれません。弘前大学では、「世界に発信し、地域と共に創造する」をモットーに掲げているのですから、これから社会に、そして、世界に羽ばたくためにも、津軽の歴史や文化に誇りが持てる「国際人」でなければなりません。グローバル社会であればこそ、しっかりとしたアイデンティティが必要なのです。

このオムニバス授業では、「津軽の歴史と文化」に焦点を当てます。たとえば、弘前藩の庶民の生活はどのようなものであったか、弘前の夏の夜を彩る弘前ねぶた絵、津軽塗、津軽三味線など、さらに、弘前大学前身の旧制弘前高等学校における「高等普通教育」はどのようなものであったかを学びます。また、「津軽の文学」は、日本文学史のなかに独立した章が立てられるほど知名度が高いものですが、そのような文学を育んだ津軽の風土はどのようなものだったのか。卒業生の文豪・太宰治の青春はどのようなものだったのか。石坂洋次郎の小説『青い山脈』には、敗戦時期の地方都市(弘前)の学校における民主化への葛藤がどのように描かれているのか等々、青森県の高校の教員との連携によって、幅広い教養を身につけてもらうことを目的とします。

* 弘前大学21世紀教育センター高等教育研究開発室

Faculty Development Office, Center for 21st Century Education, Hirosaki University

学生は、授業前に、附属図書館の「津軽学コーナー」の参考文献を読み、またビデオを鑑賞してから授業に臨みます。さらに、授業ごとに「講義メモ」を作成します。これは単に授業内容をメモするというものではなく、授業内容を「パラフレーズ」して、自分の言葉でまとめるものです。最終的に、これを授業記録としての「ポートフォリオ」にまとめあげます。

授業内容

「弘前ねぶた絵の歴史および実演」(八嶋龍仙・津軽伝統ねぶた絵師)

ねぶた祭りがなぜ今日まで伝承されてきたかは、津軽に生まれ育ち、津軽に住んできた人でなければ分からないところがあります。八嶋氏の幼少の頃から今日に至るまでの半生を通して、なぜ「ねぶた絵師」になり、なぜ「ねぶた絵」を伝承してきたのか、また、津軽人の気質や伝統文化なども織りまぜてお話を聞きます。授業では、ねぶた絵を描くための材料や道具の説明、ねぶた絵の描き方などの実演してもらいます。受講者は、きっと、八嶋氏の津軽弁の美しさに魅了されることでしょう。

「津軽三味線の歴史および演奏」(笹川皇人・津軽三味線奏者)

津軽で生まれ、津軽で育った芸能、津軽三味線の生い立ち、背景等の歴史を本学教育学部卒業の「先輩」からわかりやすく繙いてもらいます。津軽三味線という楽器がどういうものかを知り、津軽三味線の生演奏で聴いて、津軽の芸能文化を体験してもらいます。また、時代と共に変化してきた津軽三味線演奏の違いも肌で体験してもらいます。

「弘前藩の歴史と文化」(長谷川成一・人文学部教授)

本州の北端に位置する弘前藩は、北では津軽海峡を挟んだ蝦夷地・北海道から、また東・南では南部・秋田地方から、西からは日本海海運を介して、ヒト・モノ・情報が行き交う交差点でした。このように多様な政治・経済・文化の影響を受けた弘前藩について、藩の成り立ちから弘前・青森の都市の成立と発展など、多岐にわたる弘前藩固有の各問題を講義のなかで考えます。

「石坂洋次郎『青い山脈』」(舘田勝弘・弘前中央高等学校校長)

石坂洋次郎の「青い山脈」は、戦後の津軽を舞台とした作品です。石坂が学園を舞台とした作品には、戦前の「若い人」があり、戦後は「青い山脈」があると言えます。この間に、石坂はフィリピンで、しかも、長期にわたる二度の従軍体験をしています。この体験は石坂に何をもちたらし、「青い山脈」にどのように反映されているのか。さらに、戦後の朝日新聞が新聞小説を再開するに際し「青い山脈」を最初に取り上げた意味もあわせて考えることにします。

「旧制弘前高校の太宰治」(相馬明文・黒石高等学校教諭)

昭和2年4月、津島修治は旧制弘前高等学校に入学しました。この時既に同人誌『蜃気楼』や『細胞文藝』に初期作品を発表していた。同3年12月新聞雑誌部委員となつてからは、「弘高新聞」「校友会雑誌」などを発表舞台に加えた。同5年『座標』が創刊され「地主一代」の連載を開始した。同年3月作家太宰治への資質を醸成した3年間の弘高を卒えた。

「津軽方言詩」(山田 尚・詩誌「亜土」主宰)

津軽に方言詩が誕生した背景から、福士幸次郎が提唱した地方主義の系譜が、文学にどのように伝えられたか。郷土の先人による「津軽の詩(うた)」を通して、方言独得のニュアンスをもった言葉の響きと「エスプリ」を味わい、その課題と津軽の風土が生んだ文学について考えます。

「寺山修司の世界 寺山修司と青森」(櫻庭和浩・青森北高等学校教諭)

昭和30年代から50年代にかけて俳句、短歌、詩、小説、評論、作詞、映画、演劇、写真など、多彩なジャンルで活躍し、自ら「職業は寺山修司」と宣言していた寺山修司の原点は故郷青森県にあった。出生から青森高校を卒業するまでの18年間の軌跡をあらためて検証し、合わせて上京後の活躍を追いながら、時代の寵児と謳われ、今なお多くの支持者を持ち続ける寺山修司の世界について、その魅力を探ります。

「現在活躍中の文学者 長部日出雄、鎌田慧、三浦雅士を中心として」

(齋藤三千政・大鰐高等学校校長)

日本の文学史に燦然と輝く、津軽出身の文学者。明治の言論界の巨星、陸羯南をはじめ、佐藤紅緑、石坂洋次郎、太宰治、寺山修司など、その数は枚挙に暇がない。また、どの文学者も津軽の風土から強い影響を受けている。しかも文学者同士の関係性も濃厚である。さらに、現在活躍中の長部日出雄、鎌田慧、三浦雅士は先達を高く評価している。ここに、津軽の文学の際立った特徴を読み取ることができる。

「旧制弘前高校の歴史」(前島郁雄・東京都立大学名誉教授)

1920(大正 9)年に、県民と弘前市民の強い要望によって官立弘前高等学校が設立されました。全国に官公私立合わせて32校あった学校の一つで、当時の学校制度の中で特異な位置を占めていた。北海道、東北、関東の各地を中心に全国から集まった生徒が弘前で過ごした3年間は、彼らの人生にとり掛け替えのない期間であった。1950(昭和25)年に、学制改革により閉校せざるを得なかった短い歴史の中で、卒業した者は4747名に過ぎない。教授と生徒の間に生まれた信頼関係、生徒間で培われた友情、市民との間に作られた親愛感は、卒業後も長く続いた。卒業生は、主に東北大、東大、京大などに学び、社会の各分野で活躍した。弘前を離れた後も長く母校とその後身の大学、さらに弘前の地を思い、この地に回帰し、津軽の歴史・文化・教育が守られていくことを願っている。

「旧制官立弘前高等学校外国人教師館と洋風建築」(芳野明・教育学部助教授)

津軽地方は、洋風建築の宝庫である。ことに弘前では明治期に堀江佐吉という棟梁が活躍し、数々の秀逸な建築を遺しました。佐吉の系譜は後の世代にも受け継がれ、大正期に入ってもいくつかの興味深い建物が生み出されました。この授業では、キャンパス内に移築された旧制官立弘前高等学校の外国人教師館を中心に、弘前のいくつかの洋風建築について取り上げ、その見所を紹介します。

「津軽塗の文化と歴史および実習」(佐藤武司・弘前大学名誉教授)

津軽塗と呼ばれている漆器類があります。これら漆器の表面意匠は、江戸時代、江戸の最先端の技法が津軽へ導入され、その技法によって塗られたものです。今日の津軽塗と江戸時代の漆器を比較すると大きな違いがあり、「これは本当に江戸時代の津軽塗ですか？」という疑問が生じる。

津軽塗を注意深く観察すると、日本人の自然観・仏教や儒教の教え・西欧近代文化の影響が凝縮されていることに気がきます。

津軽の伝統文化の謎を講義と漆器の鑑賞を通して理解し、体験学習によって、漆器の艶の出し方を体得します。

おわりに

「授業の趣旨」のところでも述べたように、弘前大学は、「世界に発信し、地域と共に創造する」をモットーに掲げているのですから、これから社会に、そして世界に羽ばたくためにも、津軽の歴史や文化に誇りが持てる「国際人」であることが求められます。グローバル社会であればこそ、確固たるアイデンティティが必要なのです。